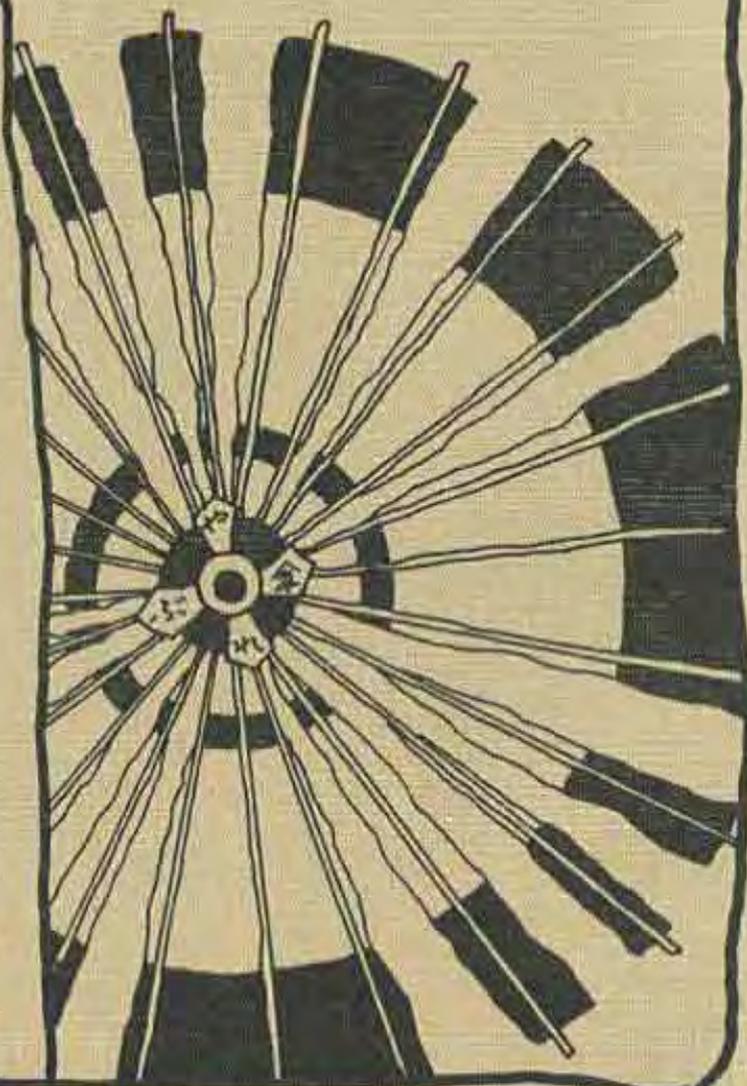


やぶれ傘



九十三号

二〇一六年十二月

洋梨を二つ離して置いてみる 根橋宏次

北空がめうに明るい雪もよひ 大島英昭

七度目の霜月母の靴捨てる きくちきみえ

干したシャツが風によじれる冬の薔薇 藤井美晴

チエリストの楽屋口より出る夜寒 丑久保 勲

野路行けば膝の高さに赤とんぼ 廣瀬雅男

裏道は昔のまんま秋時雨 小山陽子

焼き栗とモーパッサンの短編と 青谷小枝

頂上のひとりの昼餉秋の雲 白石正躬

駅前の更地に蛇口赤のまま 瀬島酒望

釜底におこげのたんと冬隣 天野美登里

一枚は刈られる前や鳥威し 渡邊孝彦

店仕舞ひ早き巣鴨へ小六月 安藤久美子

塗り文箱に螺鈿のもみち初時雨 有賀昌子

これよりは父の生地や蝗とぶ 秋山信行

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大 崎 紀 夫 選

山里のどの家も軒に干大根 菊池洋子

黄落の音なき音を聴くベンチ 久世孝雄

ハナミツキ秋は紅き実光らせて 松村光典

秋の日を座敷に上げて午後一時 武藤節子

風呂釜の湯焚きの音と虫の音と 泉 一九

若ければ走つた筈が秋時雨 岩藤礼子

垂れ下がる裸電球菊花展 大野芳久

秋うららヒールの高き靴を履く 岡田香緒里

秋暑し老人ホームフェスティバル 黒木東吾

焙じ茶のぬくもりを掌に暮の秋 齋藤朋子

ゆらゆらと朝方のなるリンゴむく 鈴木昌子

秋日差傾く杭に亀登る 時田義勝

潮の目の動かぬ小昼とろろ汁 貫井照子

ドラゴンの田んぼアートや豊の秋 萩原久代

中天にうつすらと月鵬の昼 松本正生

冬 隣

天野美登里

群雀庭の畑に寄りにけり
末枯れのめうがに夜の来たりけり
裏窓の鍵こはれをり蚯蚓鳴く
金網にかみし美男葛引く
小流れの瘦せてゆくなり釣船草
食卓に鍵のせしまま早生蜜柑
茶の花や朝日さしくる野面積
釜底におこげのたんと冬隣
山あひの川の流れや冬支度
侘助の浮かぶブリキの馬穴かな

夕時雨

渡邊孝彦

石段を下りれば田んぼ泡立草
芋の葉の向きさまざまにゆれてゐる
木に登り運動会を見下ろす子
高台の周りぐるつと薄原
採れたての芋の山積み猫車
一枚は刈られる前や鳥威し
雲赤く街薄赤く秋の暮
新藁の山と積みまれて猫車
朝寒や山靴のひも駄で締め
夕時雨公園の木々まばらなる

茶の花

安藤久美子

林檎剥く皮輪になって輪になって
草の花石に座れば目の高さ
紅葉かつ散る夜のバス停留所
黄落を浴びに今年もこの並木
たこ焼きに楊枝を木の实しきり落つ
店仕舞ひ早起 巢鴨へ小六月
まばらなる学食の席冬の午後
二日目のおでんに芥子皿の縁
茶の花に日照雨カフェの大硝子
悴みし両手サラダの出来上がる

初時雨

有賀昌子

右行けば金木犀のつづく道
月白や梶の葉紋の背にひとつ
はればれと一叢白き曼珠沙華
ぱりぱりと夫はバケツト秋の朝
置き去りのボールに釣瓶落しかな
鍵穴に狗尾草の挿されゐる
石路の花願掛け石に銭三つ
松茸を包む京都の新聞紙
塗り文箱に螺釘のもみぢ初時雨
琴造りの原木立てである小春

蛙

秋山信行

新米のむすび頬張る道の駅
桔梗や流れに鯉の抗しゐる
神木の洞に灯の点く秋まつり
面舵の船の遠のく秋の湾
鍬の土はらひ了へけり秋茜
行く秋の体重計にそつと乗る
初穫りの芋を荷台に漕ぐペダル
秋深し掘り起されしままの畑
郁子の用くぐりて友の写真展
これよりは父の生地や蛙とぶ

干大根

菊池洋子

その中に子を抱く羅漢竹の春
弾みきしどんぐりにまだあるぬくみ
ど忘れのふつと名のである夜長かな
手相見のメールみてゐる夜長の灯
鴟猛るつづらをりゆくくらま径
冬近き浜に流木乾きたる
山里のどの家も軒に干大根
しぐるるや京にイタリアレストラン
雲を眼下に秋惜しむ山の宿
肉球をなめる黒猫冬近し

黄落

久世孝雄

秋高し自衛隊機の大編隊
酒蔵の大桶の下ちちろ鳴く
遠く見る桜紅葉の並木かな
鉄塔の影長々と稲雀
先づ蔓をあまねく伐りて藪を掘る
身にしむや至急回覧回ってくる
草紅葉山小屋風の一軒家
旅先へ届く訃報や紅葉燃ゆ
やや寒や笛吹川の舫ひ舟
黄落の音なき音を聴くベンチ

木の 実

松村光典

ハナミヅキ秋は紅き実光らせて
天高し社の森に抜ける空
秋を撮る車椅子なるカメラマン
わが庭の葡萄ひと粒味見して
ラクウシヨウなる杉の実の硬きこと
亡き兄を肴にしたる秋彼岸
アスファルト道へ木の実のしきり落つ
やはらかき黄葉の山を踏んでみる
鼻先へ木枯らし一号バスを待つ
鴨が二羽身づくろひする昼下がり

傘さして次ぎ次ぎ寺へ秋彼岸
 秋の日を座敷に上げて午後一時
 秋の風遊女の墓は片隅に
 うまの合ふ人と向き合ふとろろ汁
 秋川の流れゆつくり渡し跡
 秋深し歩けば歩く影法師
 雨上がり音の消えたる枯葉道

武藤節子

皮むきの甘栗供へ十三夜
 道の駅の池に萍紅葉かな
 ひつぢ田の道をパトカーゆつくりと
 竹林を尾長飛び交ふ小春かな
 雪の富士を右に左にバス旅行
 裏道の冬菊東ねられてをり
 山門に下馬の立札寒椿

村田武

森美佐子

朝日射す蜥蜴ちよろちよろ路地わたる
仲見世の和装小物屋秋初め
記念碑に先祖の名前秋彼岸
今年米コイン精米機に入れて
松手入れ見様見真似の枝捌き
秋日和園児乗せゆく乳母車
樟脳の匂ふ茶箱や冬支度

柳田美代子

憂きことの多き日々過ぎ秋気澄む
惹なきひと日となりぬ栗おこは
行きずりの人に会釈す秋時雨
小春日の窓際猫の定位置に
齒の疹き止まず木枯し吹き荒れて
真つ新たな俳句手帳に冬日差し
認知症ひとつごとくならず冬ざる